古典学習深化の可能性

―『源氏物語』の場合―

加藤直美

はじめに

私が『源氏物語』の世界に強く引かれ出したのは、教員になって選択の古典を担当するようになってからである。自分で研究を重ねるうちに、時代に翻弄されながらも、各々の特性を精一杯出して生き抜いている人々の姿が、鮮明に私の頭の中に浮かびあがってきたのである。

高等学校の最終学年である三年生の段階で、是非この魅力ある大作『源氏物語』を、表面的な内容読解に留まらず、より深い鑑賞へと導いていきたいという願いから、いくつかの実践を試みた。そこから私なりに得たことを報告したい。

Ⅰ、『源氏物語』の学習で目指すこと

膨大な長編であるこの物語をどう学習していくことが、古典学習の総まとめの時期である高校三年生にとって価値があるのだろうか。私の考えは以下の通りである。

① 今まで培ってきた基礎的な読解技術を使って、的確に内容を読みとる。

② 文章構成、人物設定、心情表現、情景描写など、物語の卓越した部分を味わう。

③ 作者の思想、ものの味方を探り、理解する。

④ 日本の文化的遺産である物語文学に親しむ。

⑤ 学習を通して、生徒各々の生活や人生を振り返って考える。

これらのことが満たされれば、より深い古典学習がなされたと言えるのではなかろうか。

Ⅱ、教材編成について

『源氏物語』のどの部分を抽出し、教材編成をするかということは、物語世界の鑑賞に大きく関わってくる問題である。実際の教科書のいくつかの傾向を調べてみると、次の三系列になる。

A、全体をダイジェストにまとめた教材編成

主要な巻から中心となる部分を抜き出し、『源氏物語』全体が大きく把握できるように配列したもの。取り上げられている巻は、桐壺、帚木、若紫、夕顔、紅葉賀、須磨、明石、薄雲、乙女、玉鬘、蛍、藤裏葉、若菜上・下、御法、橋姫、浮舟、夢浮橋などである。大部分の教科書がこの型である。

B、一巻を集中的に取り上げた教材編成

帚木の頭中将の体験談から夕顔、玉鬘へという一つの流れをとりあげたもの。『源氏物語』の一端を効果的に学ばせようという趣旨である。一社しか見られない。

C、著名な部分を断片的に三、四個所取り上げる教材編成

定評のある、桐壺、若紫、夕顔、須磨、橋姫、少女、御法などが取り上げられている。古典総合として、『源氏物語』の代表的な部分だけに触れておくという意図である。

『源氏物語』を大きく授業で取り上げる場合は、AとBのどちらかの教材を選択することになろう。Aは、全体を大きく把握するうえではよいが、大まか過ぎて物語としての盛り上がりに欠け、興味が削がれるという短所がある。Bは、一つの小事件として読者を飽きさせない利点はあるが、『源氏物語』学習としては片寄りがありすぎる感はある。実際、Bの型を取っているのは数少なく、主流はやはりAである。

私が勤務した二校では、偶然にもA、B二系列の教材を使用したので、それぞれについて、授業の実際を次に示す。また、生徒の実態も両校にはかなりの違いがあったため、おのずと授業形態も違っている。

A系列採用の高校は、進学、就職が半々の状態で、入試科目に古文が必要な生徒はほとんどいない。

B系列採用の高校は、ほとんど全員が入試に古文が必要で、二次試験にもあるという生徒が半分程度いる。

Ⅲ、授業の実際

A、全体をダイジェストにまとめた教材編成

1. 目標　女性への制約が多かった時代に、光源氏、薫を巡って精一杯生き抜いた女性たちの生き様を探り、人としてより良い生き方について考えさせる。
2. 時期　第三学年一・二学期　一九八七年六月～九月
二十五時間
3. 対象　広島県立高宮高等学校三年選択古文のクラス　四単位もの　25名　（男2・女23）
4. 教材

(a)第一学習社「古典（古文）」二訂版

桐壺（冒頭から桐壺の部屋まで・桐壺を失った帝の嘆き・運命の予告）　夕顔（なにがしの院で語らう場面）　須磨（須磨の秋）　乙女（源氏の夕霧への態度）　藤裏葉（昇進の喜び）　御法（紫の上の死）　橋姫（薫、八の宮の姫たちを垣間見る）

(b)「浮舟」（ダイジェスト版　現代語訳『源氏物語』竹本哲子著

東洋堂企画出版社より）

5．指導過程

第一次　物語全体の概要説明をする。（資1）……一時間

第二次　教材(a)の読解。【班学習を取り入れて】……十三時間

①教材(a)を班で口語訳に直す作業を分担させ、訳本を作らせる。

②訳本を輪読させる。

第三次　物語全体の把握。【視聴覚教材・資料を取り入れて】……五時間

①ビデオ（講談社オリジナル・ビデオ「ビデオ絵巻　あさきゆめみし」〔四五分程度〕、朝日新聞東京本社アニメ「源氏物語」〔一〇七分〕）を視聴させる。

②ビデオを鑑賞しての感想文を書かせる。

③感想文から出た要望や疑問について、講義をする。（資2）

（夏休みの課題で、源氏物語に関するものを読んで、わかったことについてレポート提出させる。）

第四次　教材(b)の読解。【口語訳からの内容理解、学習プリント、討論形式を取り入れて】……六時間

①教材(b)を輪読させる。

②学習プリントに沿って、各自の考えをまとめさせる。（資3）

③各自の考えを発表させ、より良い生き方について考えさせる。（資4）

6．指導の実際

(1)自分たちで作った訳本だったため、輪読にも力が入った。ただ、訳の添削に時間をかけられなかったことから、不充分な訳に留まってしまった。

(2)ビデオは抽象性が高過ぎ、意識喚起には役立ったが、教材としては用い方に一考を要する。

(3)生徒の要望、疑問をうけての講義は、資料にマンガを使ったりして、興味を覚えやすく工夫したので大変好評だったが、自分たちで研究し、発表する形が一番望ましい。

(4)「浮舟」の現代語訳がダイジェストであったことから、個々の人物像がはっきりと把握しにくかった点はあったものの、討論では素直な意見の交換ができて、日頃こういう重いテーマで話し合うことのなかった生徒にとっては、よい機会であった。

B、一巻を集中的に取り上げた教材を使った授業

1．目標　『源氏物語』の持つ文学性に迫り、そのおもしろさを実感させる。

2．時期　第三学年一・二学期　一九九〇年六月～継続中

現在十八時間

3．対象　広島大学附属高等学校三年選択古文のクラス　二単位もの　b　40名（男26・女14）d　33名（男16・女17）

4．教材　角川書店　「古典文学選　更級日記・源氏物語・大鏡」

桐壺（冒頭から袴着）帚木（雨夜の品定めの時、頭の中将の夕顔との話）夕顔（乳母の見舞いに来た時、隣の家に興味を引かれる・扇の歌に気が付く・八月十五夜・なにがしの院へ・宵過ぐるほど）　実際の授業記録は八月十五夜まで

5、指導過程

第一次　物語全体の概要を講義する。　……一時間

第二次　桐壺の読解。【文章構成から切り込んで】　……二時間

①全文を通読させる。

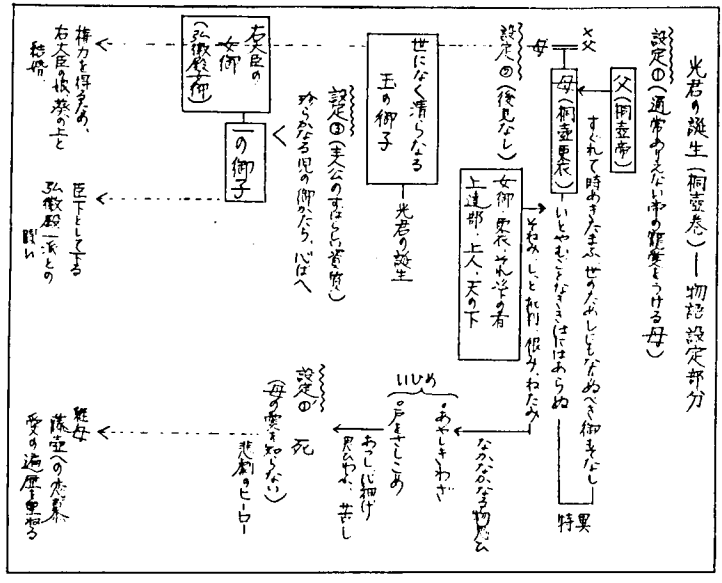
②敬語をチェックさせ、人物を把握させる。

③光君誕生以前の出来事として、設定されていることを探らせる。（設定①②）

④光君について設定されていることを探らせる。（設定①③）

板書㋐

〈板書㋐〉



第三次　帚木の読解。【学習プリント、資料の使用、班学習を取り入れて】　……五時間

①生徒の男性観、女性観をまとめ、当時の女性観と比べる。（資5）

②雨夜の品定めの説明をする。（資6）

③全文を通読させる。

④前半部は学習プリントに沿って、全体の構造を把握させる。（資7）

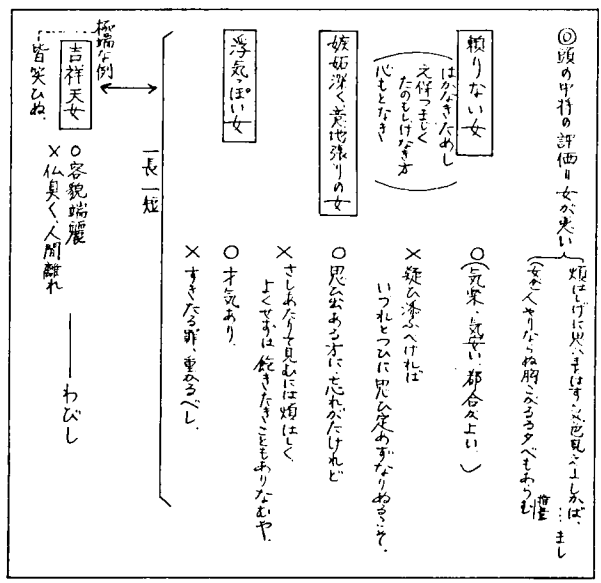
⑤班ごとに現代語訳を分担させ、発表させる。

⑥とこなつの女の人物像を探らせる。

⑦後半部の頭の中将の女性論を把握する。→板書㋑

⑧女性観について、考えをまとめさせる。

〈板書㋑〉



第四次　夕顔の読解。【学習プリント、視聴覚教材、討論形式を取り入れて】　……十時間

①全文を通読させる。
②夕顔との出会いの場面を読み取らせる。→板書㋐
③扇の主を巡っての源氏の心理変化を読み取らせる。→板書㋑

〈板書㋐〉

源氏十七才の夏―(夕人)六条御息所

〈五条なる家〉源氏の乳母・病気―間門・惟光を呼ぶ

〈傍らの家〉

檜垣(新)簾(白)(赤げ)

をかしき額つきの透き影

いかなる者の集へるならむ

垣間見

家の外観

家人への興味関心

手狭な家

「世の中はいづれかさてわかならむ　行きとまるまで宿と定むる」

玉のうてなもものはなきすまひ

白き花・蔓

夕顔(ほのぼのなる花)

「くちをしの花の契りや」

「ふさ折りて参れ」

家人とのつながりをもつ努力

より興味関心

〈板書㋑〉

〈源氏の心理〉

扇の絵・書・なつかし　歌―上品・深み

長外・関心

女の身元調査

「例のうるさき御心」

〈源氏の行動〉

惟光(乳母子)

手紙の主・宮仕へ人

したり顔・物なれて

さへるかな

「惜しとこそ思ふたれな」

惜しい女

めざましく劣るべきはにはあらむ

身分低き

惜しみず遣はしたまふ

賜ておかぬ

返歌を贈る……

「例のこの方には重からぬ御心」

心ひかれなかう

→惟光宅へ出発

作者の感想

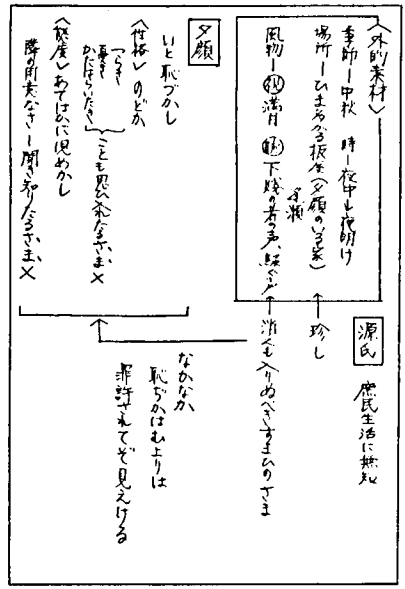
④八月十五夜の大まかな場面設定を読み取る。→板書㋔

⑤外的素材、源氏の心理を学習プリントに沿って、把握させる。（資8）

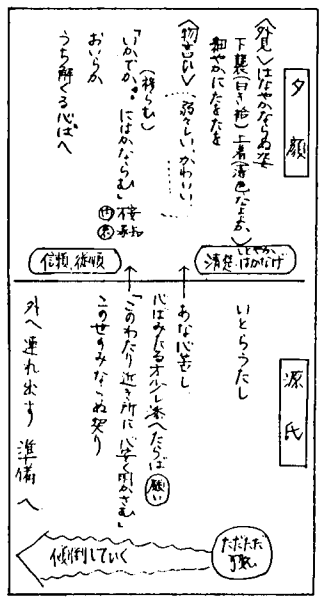
⑥文章から読みとった情景を絵に書かせ、図鑑の絵を紹介して、イメージを膨らませる。

⑦源氏と夕顔の交流の場面を読み取らせる。→板書㋕

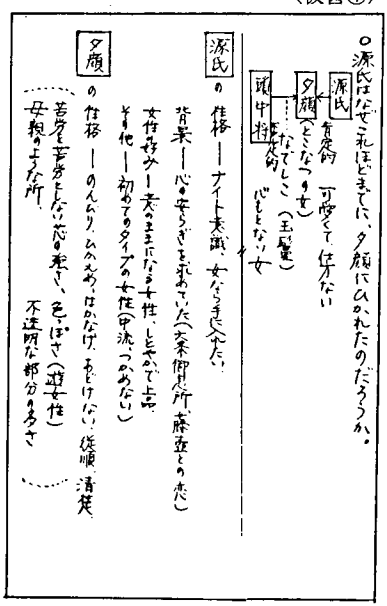
〈板書㋔〉



〈板書㋕〉



〈板書㋖〉



⑧なぜ源氏はこれほどまでに夕顔に引かれたのかというテーマで、意見をまとめさせ、発表させる。→板書㊥

参考にマンガ「あさきゆめみし」の一部分を紹介する。

6．指導の実際

(1)作者の文章設定の意図から切り込むのは、かなり高度ではあるが、その構想の大きさに気付くことは生徒の興味を引くものであろう。

(2)敬語からの主語の確定方法は、しっかり身に付いたようで、日頃の読解技術の修練の必要性を感じた。

(3)場面設定の巧みさを味わわせ、イメージ化させるために、絵を書かせることを取り入れ、実際に図鑑も見せたことは、古典知識の定着、内容理解に役立った。

(4)源氏の思いの背景にあるもの、夕顔の人物像を推測することは、生徒の興味を引いた。かなり忠実に本文を再現しているマンガとの比較は、自分たちの考えとの比較ができ、効果的だった。物語の楽しみ方を体験させてくれたように思う。

Ⅳ、古典学習の深化を目指して

『源氏物語』のより深い学習を実現していくために、指導上留意していくこととして、以下のようなことが考えられる。

①教材編成について

『源氏物語』に当てられる学習時間との兼ね合いもあろうが、全体をまとめた教材編成では、人物像がはっきりとつかみにくい。発展的な目標として、自分の生き方にまで考えを及ぼしてほしいことがあるので、私は、一巻だけを集中的に取り上げた教材編成の方が効果的だと考える。ただ、全体の筋を把握するための講義や、自主研究などの補足は必ずされなければならない。

②教材について

今回の授業の中で、「雨夜の品定め」の部分は、学習プリントを利用しても読解するのに難解さが残った。このように高度な読解技術が必要な場合は、口語訳を与えてもよいのではないか。口語訳とまではいかなくとも、注釈の詳しい教材や、主語・省略部分が補われている教材を使用することも考えられる。

③基礎的な読解技術について

古文である『源氏物語』を学習するには、どうしても基礎的な読解技術が必要である。敬語からの主語の確定や、心情語への着目や、基本構造を押さえるなどの読解技術は、日頃から特に注意して修練しておくべきである。

④補助教材（学習プリント、資料プリント、視聴覚教材）について

学習プリントは、基本構造を把握しやすくする時や、作業の手順を示し、各自の考えをまとめやすくする時に作成した。作業の手順が不明確な場合は混乱し、学習の補助とならないので、意図を明確に提示する必要がある。

資料プリントは、興味を引き、分かりやすくするために、マンガで説明したり、生徒の意見を反映したものを作成した。教師側

が、既成のものをかみくだいて与える必要があろう。

視聴覚教材は、ビデオ、図鑑、マンガを使った。イメージ化の助けとなるが、安易に使用すると鑑賞が片寄る危険性がある。教育的配慮をしたうえで使用すべきである。

補助教材は、多く必要だと考えるが、適切なところで、効果的な使用がなされなければならない。

⑤授業の切り込み方について

何を中心に据えて、切り込んでいくかで、授業が全く変わってくる。文章の特性に合った切り込み方をする必要がある。実際に行ったのは、物語の設定部分から、巧みな場面設定から、微妙な心理描写から入っていった。あと考えられるのは、中心になる心情語からの切り込みなどがある。

⑥授業形態について

古文の授業では、生徒側の知識不足から、教師側の講義形式に陥りやすい。そればかりでは、生徒の自主的な学習活動は望めない。多様な授業形態を取る必要がある。班学習をしたり、討論形式を取ったり、個人研究をさせるなど、生徒の実態や文章の特性に合ったものを選択し、いくつかを組み合わせていくことが考えられるべきである。

（広大附属中・高等学校教諭）

資1

「源氏物語」巻名（五十四巻）

●第一部

1 桐壺 きりつぼ
2 帚木 ほうきぎ
3 空蟬 うつせみ
④ 夕顔 ゆうがお
5 若紫 わかむらさき
6 末摘花 すえつむはな
7 紅葉賀 もみじのが
8 花宴 はなのえん
9 葵 あおい
10 賢木 さかき
11 花散里 はなちるさと
⑫ 須磨 すま
13 明石 あかし
14 澪標 みおつくし
15 蓬生 よもぎう
16 関屋 せきや
17 絵合 えあわせ
18 松風 まつかぜ
19 薄雲 うすくも
20 朝顔 あさがお
㉑ 乙女 おとめ
22 玉鬘 たまかずら
23 初音 はつね
24 胡蝶 こちょう
25 蛍 ほたる
26 常夏 とこなつ
27 篝火 かがりび
28 野分 のわき
29 行幸 みゆき
30 藤袴 ふじばかま
31 真木柱 まきばしら
32 梅枝 うめがえ
㉝ 藤裏葉 ふじのうらば

●第二部

34 若菜上 わかな
35 若菜下 わかな
36 柏木 かしわぎ
37 横笛 よこぶえ
38 鈴虫 すずむし
39 夕霧 ゆうぎり
㊵ 御法 みのり
41 幻 まぼろし

●第三部

42 匂宮 におうのみや
43 紅梅 こうばい
44 竹河 たけかわ
㊺ 橋姫 はしひめ
46 椎本 しいがもと
47 総角 あげまき
48 早蕨 さわらび
49 宿木 やどりぎ
50 東屋 あずまや
51 浮舟 うきふね
52 蜻蛉 かげろう
53 手習 てならい
54 夢浮橋 ゆめのうきはし

帖・十・治・字

○印は教科書にのっているもの。

光源氏をめぐる人々

▼源氏をとりまく女性たち▼

藤壺——禁断の恋

源氏はわが子・許されないと知りつつ燃え上がる恋、その命がけの愛を貫ぬいた瞬間から罪を背負う。源氏の母代であり、永遠の恋人。

葵の上——愛のない結婚の哀しさ

正式な結婚で結ばれた夫婦も、愛がないとその生活は冷えびえとした日々でしかなく、心が通うのは残酷にも葵の上の死の直前のこと。

六条御息所——誇りゆえ燃える嫉妬の炎

才色兼備のサロンの女王・生霊となるまで源氏を愛して愛しぬいた、知性や教養でも押えきれない激しい愛。源氏には気のおける恋人。

夕顔——灼熱の恋のはかなさ

ある夕暮、偶然に始まったひと夏の恋。夕顔の花にも似て短くも激しく燃え、唐突に終わりを迎える。

空蟬と末摘花——個性的な中流の女たち

決して美人ではないけれど、賢さも洗練されたセンスも心がけしだい、ともに中流の女性ながら、その生き様は、自ずと違ってきます。

朧月夜の君——奔放な愛を生きて

皇太子妃に内定しながら、源氏との危険な愛の境地を開いていく、才気煥発な美人。心ならずも源氏失脚のきっかけとなる危の相手。

槿の君——プラトニック・ラブを貫いて

葵の上亡き後の正妻候補のひとり。結婚が女の幸福を保証しないと考えるこの知性の持主はついに源氏の求愛を拒み通す源氏のいとこ。

明石の上——中流ゆえの哀しい愛にたえて

中流の身を厳しく受けとめ、さらに源氏に人間として対等の愛を求めた女性。品性と母としての強い愛で結局安定した人生を送ります。

玉鬘——幸せな人生を全うした賢い愛

分別ざかりの中年源氏の前に現われた、夕顔の忘れ形見。源氏の好き心をかわし、前向きに毅然と生きた、賢いマイ・フェア・レディ。

女三の宮——幼妻のいたいけな愛のゆくえ

晩年の源氏に降嫁した帝の愛娘。その幼さが源氏を失望させ、柏木との過失を招く。源氏の老いと苦悩を浮き彫りにする正妻。

紫の上——生涯をかけた愛の果てに

源氏に最も信頼された完璧な妻。絶対的愛をかちえたと信じても、いわば内縁関係、女三の宮の降嫁を機に不信と失望を募らせていく。

浮舟——三角関係にゆらぐ女心

薫の知性にひかれ、匂宮の情熱にも負けてしまう哀しさ。二人の間を揺れ動いた女性が、恋を捨て世を捨て始めて強い女に生れ変わる。

「源氏物語」を学習して、様々な要望が出てきました。それらからピックアップした次の項目について、さらに学習を深めていきましょう。

一 影で愛された人たち ——末摘花・花散里・空蟬・朝顔・玉鬘

《番外編》 近江の君・典侍 秋好中宮

二 女の人たちのその後 —— 六条院での夢のような世界 ——

三 源氏の老後、及びその死

四 生活様式 —— 服・食・住 ——

五 源氏の子〝夕霧〟について

六 源氏の死後の世界 ——『宇治十帖』——〝浮舟〟をめぐる世界

一 影で愛された人たち

『末摘花』

プロフィール

故常陸宮の末娘。親に先立たれ、一人となり、生活も貧しくなって、七弦琴ばかりひいている姫君。

空蟬と別れ、夕顔と死別して、昔ばかりをしのぶ源氏が、ある命婦との話から知ったのが、この末摘花のこと。落ちぶれた貴族の姫君ときいて、源氏の浮気心がそそられます。

なんとか会うことがかなったけれど、この姫君は、すごい引っこみ思案の性格で、琴もたいした腕前ではないし、式きちんと返せなかったのです。それでも、周りの者の助けで、雪の夜、ついにご対面となります。姫君の容姿について、本文を次に抜き出します。

「胴長で、なよやかとか、すらりとかいう感じからは程遠い。お鼻にはぎょっとして目をみはった。まるで象のように長くたれ、先の方が赤くなっている。顔は青白く、しかもとても長い。額はおでこ、体はやせすぎすぎすと骨ばっている。ショックで息もつけないほどであった。」

「これほどまでに思いとこうが断っているとは珍しい。」とまで表現されています。また、着物もあまりにセンスが悪く、黒テンの毛皮、紫色のぼけた着物をきていました。その上、ウーウーとしか言えず、会話のセンスゼロ。

それでも、この姫君には、美しい黒髪があったのが、せめてもの救いでしたが……。

こんな姫君でも、源氏は見捨てず、自分の二条の院へ住まわせます。不器用ではあっても、素直で一生懸命な末摘花の生き方に、源氏も感じる所があったのだと思います。

〝人間は顔じゃない！ 心だ〟を地でいった姫君でした。

花散里

プロフィール

故桐壺帝の女御であった麗景殿の妹君。特に美人でも才女でもなかったが、おだやかな人柄である。

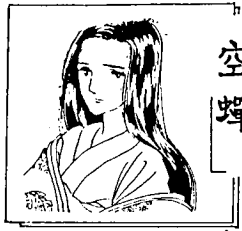
源氏の贈った歌

〝橘の香をなつかしみほとときす花散る里をたづねてぞ訪ふ〟という歌より、花散里と呼ばれる彼女は、怖のかたわらでひっそりとつましやかに生きる女性として登場しています。源氏とのくわしいなれそめも書かれていないし、容姿、言動もほとんど語られておらず、いかにも影薄い人物といえるだろう。しかし、この花散里の存在意義は、非常に大きいのです。源氏が須磨から戻り、勢力をわが者とし、六条の院を造設した時、そこに住まわせる女性として、まず花散里が彼の念頭にあったのは、彼女が捨てておけぬ人であったからだが、同時に源氏の子夕霧の後見（世話役）として花散里に白羽の矢が立てられたことにも、よるだろう。

花散里と源氏との関係は、源氏三十二歳ごろ夜をともに過ごすことはもうなくなっていたらしい。それもわが宿運としてうけとめ、謙虚な心ばえに、源氏の彼女に対するいたわりも厚く、紫の上の扱いにもほとんど劣らぬ有様だったようです。

花散里は源氏の死後二条の東院を遺産として譲り受けています。きっと満ち足りた平安な日々だったにちがいありません。

空蟬



プロフィール

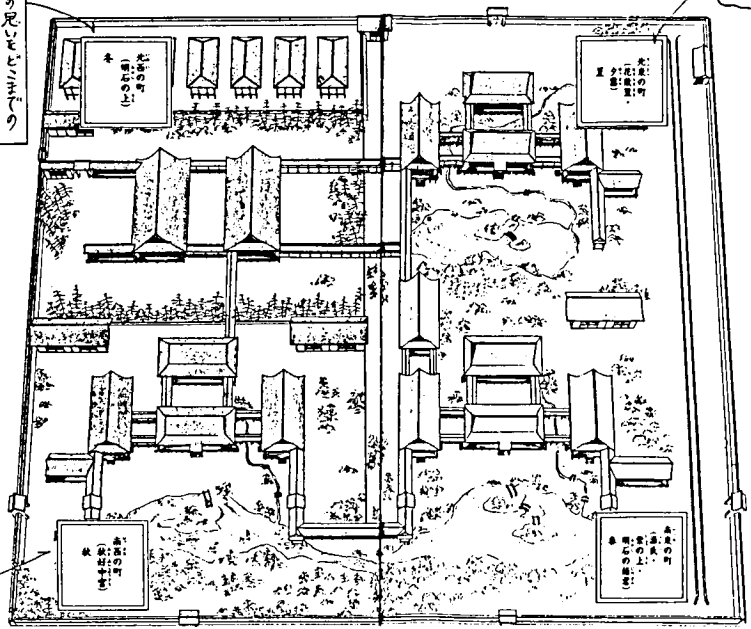
中納言兼衛門督だった人の娘。両親ともに先立たれ、家運の衰えにより、老受領伊予の介という男の後妻というさえない境涯を生きる身となる。

源氏とのなれそめは、方違え所として伊予の介の家敷が使われたことから。

二　女の人たちのその後——六条院での夢のような世界——

源氏三十五歳の年、二条の東院に加えて、春夏秋冬よりなる安社な大邸宅、六条院を建設します。四季のそれぞれの町に、源氏はかかわりのある女性たちを配し、ここに独特の「みやび」の秩序世界が形成されます。

（末摘花と空蝉は、二条院にひきとられています。）



実の娘への思いをどこまでのおさえ、来るべき晴れの日を待ちつづけた、つらくわびしい境涯を象徴している。

この土地は、かつて六条御息所の旧宅があったことより、その娘、秋好中宮が住まうことになった。

資 3

古典「源氏物語」―浮舟―　年　名（　　）

① 匂宮、薫の間でゆれ動く浮舟の女心について

この生き方は、a. 仕方がないと思う。
b. 許せないと思う。
c. その他（　　）

そう思う理由は、

② 死んで愛をつらぬいた大君の生き方について、

a. よくわかる。
b. よくわからない。
c. その他（　　）

こんな部分からそう思う。

③ 女の目から見た、匂宮・薫の姿について、素直な感想をのべよ!!

男

〔匂宮〕

〔薫〕

④ よーわからん。ここはどうも疑問だ、どうしても納得がいかない。もっとくわしく知りたいことなど、なんでもいいから、出してみて!

『源氏物語』の学習を終えて——

相当な労力と時間をかけて、『源氏物語』の学習をしましたが、"しんどかった。"だれた！"という印象だけ残すのでは寂しいので、みんなの感想をまとめにしました。

(しあわせになる生き方とは)信念をもって、自分に自信を持って生きることが人間らしい生き方だと思う。

しあわせとは、自分が心から楽しめるものや、うれしいものを探しだし、それが手に入った時の感情に近いものだと思う。それをつかむためには、自分で努力してどうすれば一番よいのか、ということを考えることではないだろうか。

誠実に生きていくことがやはり人間としての生き方だと思う。

浮舟は自分はそんな運命なんだからと受けいっているかどうかが問題だと思う。……受けいれれば、それなりにまたちがった人生になったんだと思う。

人と話し合い協調しながらも、常に自分の信念は持ち続けていき、そういうのが理想のように感じることが多いです。……自分がこれでいいんだと思うことができたら、その時、端から見て不幸に見えても、自分選択にとっては、しあわせの一部なのではないかと思います。

もう少し思慮深く人の心の中を考えてあげられるような人になって、自分をいつもみつめなおせるぐらいの心のゆとりのある生き方が、人間らしい生き方だと思う。

浮舟は何もしないまま、まわりの環境に流され自分というものを出せないままに育ってきた。だから、どういうのが本当の自分なのか、どうすれば、彼の自分なのか、わからずに、薫と匂宮の二人に愛された時、どちらともつかない態度で最後には六の男性とも別れるようになってしまう。

浮舟の生き方は、この立場だとこれが精一杯な幸せな生き方なのではないかと思う。生まれた時から人に愛してもらえずにいたのだから、本当の愛でなくても、一時の愛でもその時が、幸せなういと考えてしまったのではないかと思う。

自分を見失わずに生きることが一番だと思う。

人間らしく生きていくためには、どんなつらいことがあってもくじけないで最後まで根性でねばって、自分の生きていく夢や希望は決して捨てない。それが本当の人間らしい生き方ではないかと思う。

自分世界が何かを求めていかれる人であればと思っています。そのことが幸福だと思うからです。

自分うことを真剣に考えて行動して後悔することがないようにしたいと思いました。

浮舟は、最後に尼になって強い女に生まれ変わっていったので、そこでや、と浮舟の本当の幸せというものを、自分でつかんだんじゃないかと思います。

与えられた運命をくつがえす気力で、自分の幸福にこだわる。そうすれば、幸せはむこうからやってくるのではないかと思う。

素敵な生き方をめざしていきたいね！

古文選択者（58名）の異性観についての分析

★理想の女性像　（29名）

▽外見において

①程良い背の高さ（3）

②スタイルのよい体（3）――細いけれども、柔らかそう

③可愛い・美人（6）

いい匂いがする（2）、ストレートで、きれいな髪、個性的な人（ブラックジーンズがよく似合う人）、きれいな目をしている

▽内面において

①頭がいい（8）――物分かりがいい、気がきく

②控え目で、上品（8）――ミーハーでない、あつかましくない、物当たりが穏やか

③明るい（7）

④芯がしっかりしている（5）――自分なりの考えを持つ人、どんな時でも強く生きられる人

⑤優しい（3）

思い遣りがある（2）、可愛げがある（2）、健康（2）、スポーツが出来る（2）、音痴でない、悪いことを考えない、博打が好きな人、

‡聡明かつ上品で、現代的明るさを持った女性というのがまとまった意見のようである。

▽自分との関わりにおいて

①家事が出来る（5）――料理がまずくない、洗濯をしてくれる

②趣味のあう人（3）

一緒にいて楽しい、僕にないものをもっている、普段強がりでも、最後には頼ってくる人、僕につくしてくれる人、普通以上にやきもちを焼いてくれる

‡過程の影響からか、女性に家事のうまさを求めている、保守的な男子が多いようである。

★理想の男性像　（29名）

▽外見において

①背が高い（5）

②清潔感があり、おしゃれすぎない（3）

煙草を吸わない（2）、見ていて目の保養になる人

‡かっこいいにこしたことはないけれども、顔などその人を好きになればよく見えるなどの意見もあり、それほど美貌にこだわっていないようである。

▽内面において

①ユーモアがある（14）――話題が豊富

②信念があり、行動力がある（9）――普段はのほほんとしていても、ここぞという時は毅然とした態度で冷静に対処する人、自分の意見をしっかりもっている

③頭がよい（8）――機転がきく、頭の回転が早い

④根は真面目（7）――常識がある、礼儀正しい、けじめがある

⑤思い遣りがある（5）

表面的にはそうでなくても、さりげなく優しい人（4）、包容力のある人（4）、正直な人（4）、力持ち（4）悪い人にからまれた時、よかったよかったという風潮にもっていってくれる人、スポーツができる（2）、けちでない（2）、冷え性でない、いやらしい人、苦労した人、自分を飾らない、自然な人、正義感が強く、喧嘩の仲裁にはいって、逆にされて死んでしまうような人

‡まとめると、男の中の男と呼ばれる、強くたくましく、それでいて実は優しい、賢い男性がいいようである。

▽自分との関わりにおいて

①同じ価値観、趣味をもっている（5）

②尊敬出来る人（5）――自分が知らないことを教えてくれる、私が出来ないことが出来る

③一緒にいて疲れない人（4）

④自分のことをよく分かってくれる（3）――いちいち説明しないでも、気持ちが通じる人

私が心から大好きになれる人、私のことを大事にしてくれる人、私の心を動かすパワーをもっている人

王朝の美人 —女性美のポイント—

右は、「源氏物語」中の文章から、拾てみた条件です。すべてにおいて、派手すぎず、全体的に調和のとれた美しさが、よしとされたようです。現代とくらべてどうでしょうか？

「桐壺」本文以降の内容の概略

帝は最愛の女を失って、ただただ涙にかき暮れておられた。それから数年たって、亡き桐壺更衣に生き写しだと言う先帝の四の宮を見て心を動かし、入内させなさった。この方が藤壺女御である。源氏十歳の頃であった。

源氏は死に別れた母の顔を知らない。そこへ若く美しい藤壺が宮中に入られた。亡き母にそっくりだと人々が噂している。源氏の心は躍った。子供心にいつも側にいてこの方の顔姿が見たい。

帝も母親のない源氏を不憫がって手元に置かれ、藤壺にも「この子を可愛がってやってください。」とおっしゃる。源氏は大喜びで藤壺のおられるあたりを足繁くおとづれる。

世にも美しく、帝寵のあついこの二人を、人は「光る君」「輝く日の宮」と呼んだ。

源氏は十二歳で元服する。同時に加冠の役を務めた左大臣の娘葵の上と結婚することとなった。葵の上は気位が高く、冷たい感じで、源氏より四つ年上であった。

結婚後も源氏は藤壺のことばかりが慕わしい。想いは募る一方であった。

「帚木」の内容の概略

源氏は十七歳になった。五月雨の退屈な頃、宮中の物忌みが続いて、源氏が宮中で宿直していると、頭の中将（葵の上の兄で、源氏とは親友。のちに太政大臣になる。）や左馬頭（宮中で馬の管理をする所の長官）がやってきて、いつしか話は女性論になった。これが世に言う「雨夜の品定め」である。

左馬頭が、中流の女のおもしろさや、理想の妻は少ないこと、夫婦間には寛容と知性が必要であることなどと語る。

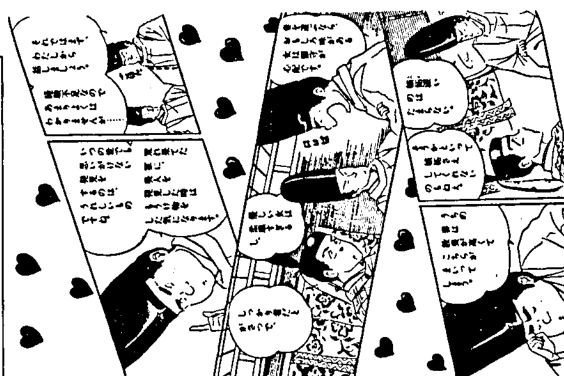
夫婦間の提言「全く情けないと思うほど、ひねくれた感じさえなければ、ただ一途に真面目で、落ち着いた性格の女が、一番いい。それ以上の優れた資質才能や気立ての良さが加わっているなら、それを喜びと思い、少し不充分なところがあっても、むやみに要求しない。」

次に彼の体験談へと話はうつる。

［体験談①　指食いの女］　まだ左馬頭が若かった頃結婚した女は、器量は悪かったが、真面目な努力家で、一生懸命尽くす女だった。しかし、嫉妬深かったので、左馬頭はその値打ちがわからず、本気では愛さなかった。女が悔しがって、彼の指をかみ切ったりしたので、喧嘩別れみたいに離れて暮らすうちに、女は死んでしまった。死なれてみると女の美点ばかりが思い出される。あんないい妻はなかった、裁縫も上手だった、染め物も巧みだったと彼は後悔するのであった。

［体験談②　浮気な女］　その妻がいる頃、時々通っていたもうひとりの女は、歌もよみ字も上手で琴もうまい美人だったが、浮気っぽい。他の男も通わせていたことがわかったので、嫌になってしまった。結局「触れなば落ちん」浮気っぽい女には用心しなさい、真面目な女がいいですよ、という話であった。

頭の中将までつられて話を始める。ここから、教科書本文の内容に入る。



「マンガ源氏物語(上)」より

資料 6

系図

- 桐壺帝 — 源氏
- 源氏 ＝ 葵の上
- 左大臣 — 葵の上、頭中将
- 頭中将 — とこなつの女（夕顔）
- 頭中将 ＝ 四の君
- 右大臣 — 四の君、弘徽殿女御

資7

頭の中の仕事表

女（にんげんを見まもる人）	頭の中の仕事
⑩ 積もりに、ついては、恨めしと思うこともあるでしょう。	
と（心ならずも）ほめられるまりまりきは（いりしまき。）	A
見なるあやつにて、又しまとたえまき。クッ	
たまりなる人とも思ふなら。たゞ朝夕にまて	
↓	B
↓	
↓	C
↓	
↓	D
↓	
↓	
↓

資 8

源氏物語　五、八月十五夜（P41～43）

二（P42と4～P43と4）

外的素材	源氏の心情・行動（本文の部分を書きぬき、その訳をつけなさい。）	作者の感想

○P41～P43と4までの文章から、想像できる光景を、絵に書いてみなさい。
出てくる外的素材は、忠実に書くこと！